

ベトナム戦争が私に教えてくれたこと

ベトナム労働総連合代表団の来日で振り返る

金融・労働研究ネットワーク 田中均

ベトナム労働総連合代表団が来日

ベトナム労働総連合代表団が昨年来日し、10月3日に金融労連と懇談した。

私は、金融労連中島康隆委員長の要請で同席した。ベトナムの銀行では男性と女性で賃金差別はなく、銀行労働者の労働条件は他産業と比べても水準が高く、その60%が女性で銀行は女性に適した産業と見なされているとの説明があった。また、銀行に非正規雇用はほとんど存在しないとの発言もあった。ただ、家事・育児は女性の役割で負担が大きいなどの発言もあった。

私は高校生の時にベトナム戦争が最も激しい時で、その影響は私の人生を大きく変えた。10月3日の懇談では、日本の銀行労働者の現状報告と言うことだったので、個人的な思いの発言は控えたが、懇談の最後に「自分が高校生の時にベトナム戦争があり、それは人生を大きく変えた。今日まで生涯を労働運動に関わってきたが、ベトナム戦争で不屈に闘うベトナムの人々に触発されたことの影響も大きい」と一言だけ述べた。

私の個人的な思いが理解されたかどうか分からないが、代表団からは「心のこもった言葉ありがとう。ベトナム人民の戦いを支援してくれたことに感謝します」との言葉があり、懇談終了後代表団のひとりから握手を求められた。

ベトナム戦争は当時の若者に非常に大きな影響を与えた。そのことは、2024年の米大統領選挙の事前予測の中で、1968年の大統領選挙を再現するのではないかとされていたことにも示される。

1968年の米大統領選挙では、ケネディ、ジョンソンの民主党政権が一方で人種差別を禁止する公民権法を制定するなどリベラルな政策を推進したが、他方でベトナム戦争を拡大したことへの批判が広がった。

特にジョンソン大統領の時期には、当時の戦略爆撃機 B52による大規模の北爆を繰り返し、世界中で若者を先頭に反戦運動が展開された。

その中で、ケネディ暗殺後に大統領を引き継いだジョンソンは立候補を断念し、代わって候補者となった民主党のヒューバート・ハンフリーは共和党のリチャード・ニクソン敗れた。

民主党のジョンソンは大統領として国内政策ではリベラルな政策を進めたが、ベトナム戦争に対する反戦運動の高まりで、共和党に政権を奪われたのが1968年の大統領選挙だった。

昨年の大統領選挙で「1968年の再現」と言われたのは、最も「プロ労働組合」(労働組合を支援する)と言われたバイデンとそれを引き継いだハリスが、他方でガザのジェノサイド(住民皆殺し)をエスカレートさせるイスラエルを支持し続けたことへの批判を拡大し敗北するという予想だった。

「ベトナム戦争犯罪」との出会い

私は北海道の富良野市出身で、1967年、高校2年生の時に JR 富良野駅前の書店で、イギリスの哲学者バートランド・ラッセル卿の「ベトナム戦争犯罪」をたまたま手にした。この1冊が74歳の今日までの人生に大きな影響を与えた。

当時、アメリカはベトナムへの軍事介入を拡大し、世界中に配備していた巨大な爆撃機 B52 をグアムに集中し「北爆」を連日繰り返した。

枯れ葉剤やナパーム弾、ボール爆弾など人間の大量殺傷のために開発された兵器を使い、赤ん坊、子どもを含む市民を大量に殺傷していた。

私の母親は東京出身で1945年3月10日の東京大空襲を被災し、私は幼い頃母から空襲の様子を繰り返し聞かされた。3月10日、母親の一家は燃え広がる火に追われて隅田川の筏の上に避難したが、炎が川面を這うように襲ってきて、丸太をつないでいた縄に燃え移り丸太がバラバラになり私の祖父母とその背中中の赤ん坊が丸太の間に沈んでいったなどを繰り返し聞いた。

この時 B29が投下したのは日本の木造家屋を燃え上がらせる焼夷弾だった。ベトナム戦争で投下されたのはさらに延焼力を高めたナパーム弾で、「ボール爆弾」は子爆弾がボール程度の大きさで、外壁にパチンコ玉のような小鉄球が多数埋め込まれている。

これが炸裂すると小鉄球が10メートル四方に飛び散り人々の皮膚に突き刺さる。犠牲となった人の背中に無数の小鉄球が突き刺さっていた。

親爆弾一つにこのボール爆弾が数百箇内蔵し、B52はその親爆弾を大量に投下する。これは、明らかに建物家屋の破壊ではなく人間を殺傷することを狙った爆弾だった。

富良野高校の「ベトナム討論会」

「ベトナム戦争犯罪」を読んで、高校2年だった私はこれほど残酷なことが現実に行われていることに激しい怒りをいだいた。怒りが激しく、そのことを知らなかった自分に腹が立ち、さらに、自分の周りの大人たちがこれほど非人道的なことを知ろうとしないことにも不信感と怒りを抱いた。

そして、これ以降新聞の読み方が変わった。ベトナム関連の記事だけでなく政治・社会問題の記事を隅々に目を通すようになった。

後に金融労連の書記となり2021年に亡くなった村上敏一氏は、富良野高校で私と同級生で生徒会長だった。彼は、模擬テストで数学は全国の上位に入る秀才で、生徒会で遅刻をなくす取り組みをする真面目生徒で、私は隠れてたばこを

吸い酒を飲んで大人になったつもりの村上氏とは反対の不真面目な「ちょい悪」生徒で、それまで接点はなかった。

遅刻・早退は常習で、生徒会が朝の登校時に校門で遅刻者のクラス氏名を確認することをしたときには「生徒会が余計なことをするな」と思った。その生徒会の村上氏が「ベトナム討論会」を呼びかけたときに、私は「生徒会も時にはいいことをするものだ」と見直した。村上氏もベトナム戦争に対して何か行動を起こしたいと考えていることを知り、これが彼と生涯にわたり同じ運動に関わる出発点になった。

遅刻をなくす取り組みについて、村上氏の位置づけを後年聞いたことを付言すると、生徒自身の自立・自治を主張するためには生徒自身が規律を質すべきだということだった。それを聞いても私は「やっぱりこいつは真面目人間で、俺とは違う人間だ」と思った。

スチューデントパワーとベトナム戦争

この時期、1967年、1968年は私だけではない。日本の学生運動だけではなく世界中でスチューデントパワー＝若い世代が社会矛盾を告発する運動が広がった。私は1969年に大学に入学したが、この年の1月に東大安田講堂事件があり学生運動のピークだった。

安田講堂事件というと新左翼と呼ばれる過激派の暴力を連想されるかも知れない。あの時代のただ中にいた者の実感は新左翼の暴力行動とは別に、学生・若者の多くが社会の矛盾を自覚し追求し自らの生き方を模索していた時代だった。

10年後の1979年に、私は、銀行労働研究会（銀労研）で金融労働運動に関わるようになった。村上氏が全相銀連（全国相互銀行従業員組合連合会）の書記になっていて、全相銀連書記局の隣りに銀労研の部屋があった。大学院で理論経済学を専攻していた私は、研究室で理論経済学を研究し続けることに限界を感じていた。村上氏を訪ねて全相銀連書記局の隣りにある銀労研を知

った。銀労研の部屋で床から天井まで積み上げられた資料（労働組合の機関紙や大学の研究紀要など）を見たとき、ここでなら労働運動と理論研究を統一的に追及できるのではないかと可能性を見た。

1960年代末から1970年代前半の学生運動は世界的な広がりを持っていた。その若者たちの運動の盛り上がりは、第2次大戦後の資本主義経済の発展が行き詰まり、若者たちが社会のあり方を問い直す中で展開したものであるが、ベトナム戦争に対する反戦運動の世界的な高まりがアメリカに限らず大きな影響を与えた。

米ソの冷戦構造の中で核戦争をも想定して世界に配備していたB52の、相当部分をグアムに集中し、先述した非人道的兵器で殺戮を繰り返したことへの批判と怒りにアメリカは包囲された。

撃墜米軍機を「特産品」に加工

またベトナム側の対応も、中国、ソ連から支援を受けていたとしても、東西の代理戦争ではなくベトナム人民による闘いであることが明白で、国際世論に積極的に効果的に訴えた。

1968年にベトナムから代表団が日本を訪れ、札幌にも来た。集会で代表団の訴えがありベトナムの特産品の販売もあった。特産品の中にジュラルミンの鍋やナイフなどの製品がたくさん販売されていた。そのジュラルミンの「特産品」には番号が刻印されていた。ベトナムで打ち落とされた米軍機のジュラルミンを素材に加工して「特産品」として販売していたのだ。刻印された番号はベトナムで何機目に打ち落とされた米軍機から作成されたかを示していた。

私はジュラルミンのペーパーナイフを買ったけれど大学受験の浪人で、それほど高価ではなかったけれどお金がなくて買えなかった。それと一緒に大砲の砲弾に詰め込んで米軍に向けて散布するビラもたくさん展示されていた。ビラには「ヘイ、ヘイ リンドン・ジョンソン(米

大統領) おまえは今日何人の子ども殺したのだ」と英語で書いてあった。

「南ベトナム」からの留学生 N 君の祖国への思い

大学院在学中に、研究科は違ったけれどベトナムからの留学生 N 君がいた。彼は南ベトナムからの留学生で、言葉を交わしているうちに詩を書くことがわかり彼の書いた詩集を1冊贈られた。ベトナム語の詩集で全く理解できなかったが彼の人柄をありがたく受け取った。

1979年に中国の人民解放軍が中・越国境を越えて侵攻し中・越戦争が勃発した。この時、たまたまであるがベトナムから歌舞団が来日して日本で公演し、私は大学院の院生仲間と観劇した。女性の踊り子がとても美しかったのと、竹を使った民族舞踊が印象的だった。公演が終わって、院生仲間居酒屋に入り一杯飲んでいるうちに中・越戦争が話題になった。主要な新聞は北京発に依拠したニュースで中国寄りの意見が大勢を占めた。

日本共産党の「しんぶん赤旗」はハノイに特派員がいて連日ハノイ発のニュースを報じていて、私は「赤旗」を読んでいただけ、口を挟むほど知識がなく発言しないでいた。この時、普段は自分からは発言しない N 君が目には涙を浮かべて必死の表情で反論した。中国が一方向的に国境を越えて侵攻してきたのだ、ベトナムに責任はないと。

彼は南ベトナム政府が陥落する前のベトナムからの留学生で、そのときの法律上の扱いがどうなっていたか知らない。ただ、いつもは控えめで積極的には発言しない彼が必死な表情でベトナムを擁護したことに、我々はベトナム人である彼を前にして無責任で評論家的な議論をしたことを反省して沈黙した。

そして、N 君の祖国への思いに敬意をいだき、必死の表情が記憶に残った。(関連記事リンク [「金融労連がベトナム銀行労組と懇談」](#))